

パネル

はほとんど消滅したように思う。

戦前と戦後のこの傾向の相違は、学問の成果の発信形態にも現れている。戦前の仏教学界においては、大日本統蔵経、大正新脩大蔵経、国訳大蔵経、国訳一切経、南伝大蔵経、チベット大蔵経など、じつに十指におよぶ「大蔵経」が編纂、あるいは招来されている。印刷文化の隆盛という課題でも注目すべきこの現象は、研究者たちの関心が仏教全体像の把握と表出に強く方向づけられていたことを物語っている。前田慧雲、高楠順次郎、木村泰賢など、当時の学界のリーダーたちがこぞって大蔵経の編纂に向かうのは、開かれた場に仏教全体をすえ置こうとする意欲の表れだろう。それに対して戦後の研究成果の発信は、個々には精緻な仕上がりではあるものの、スッタニパータやダンマパダなど、これら全集のなかからほんの一部を取り出し、仏教全体のイメージに代替させようとするものが目立っている。これらの成果は一個人の全集あるいは著作集としてまとめられ、そこに個人の名を冠した仏教学の名が、例えば中村仏教学、平川仏教学などとして、周囲から付与される点にも注意がある。相互の整合的には必ずしも関心が払われないまま、細分化され、断片化された業績の集成が、個人の名において統合されて「学」の名が付与されるという、海外はもとより、戦前の日本でも現れたことのないこの特異な現象には、仏教の全体像を描く営みから退き、諸要素に断片化したことで、部分を即全体とし、個をそのまま公とするしか方途のなくなった、戦後日本の仏教学の特色が映しだされている。

戦前日本におけるキリスト教研究

芦 名 定 道

この発題の目的は、「戦前日本におけるキリスト教研究」を概観し、その現代的意義について若干の指摘を行うことである。まず概観に先立って確認したいのは、「戦前日本」ということで問題となる開国（一八五九年）から敗戦（一九四五年）までのキリスト教研究を担った研究者について、次の三つの世代を区分することができることである。第一世代は、明治期のキリスト教思想を担った、海老名弾正、植村正久、内村鑑三、小崎弘道などのキリスト教指導者たちの世代であり、ここにキリスト教研究の発端を確認することができる。また、第二世代は、波多野精一や石原謙らからはじまり、有賀鐵太郎に至る、大正から昭和に活躍する世代である。それに対して、第三世代の研究者は、戦後にその主たる研究活動を開始し、戦後のキリスト教思想を担った世代であって、この点から判断して、本発題の範囲からは除外される（したがって、一九四六年の北森嘉蔵『神の痛みの神学』はここでは扱わない）。

最初期のキリスト教研究は、植村、内村、海老名、小崎などの第一世代のキリスト教指導者たちによって担われた。その発端には、宣教師が伝えたキリスト教思想が存在するが——伝統的で保守的な神学あるいは素朴な信仰——、こうした伝えられたキリスト教思想は、これらの第一世代のキリスト教指導者に

よって、驚くべき早さで消化され、日本語におけるキリスト教研究書となって刊行された。植村の『真理一斑』（一八八四年）はその点で画期的な意義を有している。しかし、第一世代のキリスト教研究者は、いわゆる専門的な研究者ではなく、基本的にはキリスト教会の指導者であつた点を忘れることはできない。こうしたキリスト教研究のあり方は、しばらくすると、一方における、キリスト教会あるいはそれに依拠した神学と、他方における、近代的学問としてのキリスト教研究との間の緊張を生じることになる。植村が関わることになった新神学問題、そしてその後の海老名とのキリスト論論争（一九〇一—一九〇二年）は、キリスト教研究における教会神学と近代的学問との対立の顕在化と解することができる。この対立は現代に及んでいる。

戦前のキリスト教研究も、大正期以降の第二世代の研究者になると、個々の研究領域での研究の深まりがみられるようになり、同じ欧米のキリスト教研究の紹介であっても、それは本格的で体系的な仕方で行われるようになる。その意味で、現代に至る、日本におけるキリスト教研究の基盤は、この第二世代の研究者によって形成されたと言ふことができる。これは、第二世代の研究者の活動の場が、キリスト教会や神学校に限定されず、帝国大学にまで広がったことにも関連している。こうした動向は、宣教師から始まり教会と神学校に根付いた教会的神学的なキリスト教研究からの、近代的な学としてのキリスト教研究の自立と解することができるが、それは、欧米のキリスト教研究の紹介において、英語圏のキリスト教研究からドイツ語圏

のキリスト教研究へのシフトが生じていることから伺える。またこの時期、キリスト教研究は多様な動向へと分岐することになる。こうした中で、キリスト教研究の学問的な基盤は確立されたのである。たとえば、波多野宗教哲学は、戦前日本におけるキリスト教研究の精華と言ふことができる。

以上の概観からわかるように、戦前日本のキリスト教研究は、欧米のキリスト教研究の流行に依存し、それを追跡することを主要な課題としたものであつて、その限界を指摘することは難しくない。しかし、第一世代から第二世代の研究者が据えた土台こそが、戦後から現代に至るキリスト教研究の基盤をなしていることについては、正当な評価を行わねばならず、現代日本のキリスト教研究にも、その批判的継承が求められているのである。

戦前日本におけるイスラーム研究

後藤 明

江戸時代の日本Ⅱ漢字を媒体とする学問Ⅱ儒学(宋学)＋仏教学(漢訳仏典学)

ただし、漢語によるキリスト教学と回教学(イスラーム学)は無視

新井白石『采覧異言』(二七—三三成立、二五年補訂)

『西洋紀文』(二七—二五年成立、二五年補訂)